

2021年8月15日 聖霊降臨節第13主日礼拝メッセージ

「神さまの四次元ポケット」

岡嶋千宙伝道師

聖書 列王記 上 3章 5-14節

1945年8月15日。今から76年前の今日。日本が敗北を認め、太平洋戦争が終結しました。国内だけではなく、周辺諸国を含めた世界全体に甚大な被害と損害をもたらした戦争を行ったことの反省に立ち制定された平和憲法。その憲法のもとで、わたしたちの住む日本は、あれから70年以上、他国との戦争を行うことはなく、表面的には平和を保ってきました。先週まで「平和の祭典」とされるオリンピックが開催され、24日からはパラリンピックが予定されていることも、あるいはその平和を象徴することなのかもしれません。ですが、平和の内実はというと、どうでしょう。2013年「特定秘密保護法」の成立、2015年「平和安全法制」の整備、2017年「共謀罪」の新設、という第二次安倍内閣のもとにおける一連の戦争関連法の立案と成立。そして、現・菅政権のもとでは、戦後一貫して軍事目的での学術研究に反対してきた日本学術会議の委員6名が任命を拒否され、今年6月には国民投票法の改正案が国会にて承認されました。政治の動きに目を向ければ、日本が、着々と戦争できる国としての準備を進めていることは明らかでしょう。今、平和の土台が崩されています。

平和を築くこと。そして、築いた平和を維持していくこと。それは容易ではなく、途方もない労力を有することなのでしょう。あれほどまでに悲惨で大規模な被害をもたらした二つの世界大戦を経験したにも関わらず、人類は紛争を止めることができていません。今でも、ミャンマー、アフガニスタン、シリア、そして、聖書の舞台となっているパレスチナなど世界各地で争いが続き、人々の命が失われ、命が育まれていく土地が破壊されています。平和を実現するための特效薬があればいいのに。

そう言えば、「ドラえもん」の秘密道具に、役に立ちそうなものがあります。「友だちの輪」。たとえ、けんかしている相手であっても、その輪の中に一緒に入れば、一瞬で友だちになれるというのです。この道具があれば、世界の平和も夢ではありません。平和実現の夢が叶うのです。「夢をかなえてドラえもん!!」もちろん、ドラえもんは空想のキャラクターだし、「友だちの輪」も今のところ現実には作られていません。別の方法を考えないといけない。ドラえもんよりすごい存在。22世紀の秘密道具よりもっと優れたもの。

いるじゃないですか！ 教会に集うわたしたちが「無からこの世を創り、人間を含めたすべての命あるものを生かしてくれている」と信じている神さまです。無から有を創り出す方ですから、ドラえもんの秘密道具よりもっとすごい何かをしてくれるはず。せいぜい2、3人しか入れない「友だちの輪」より、ずっと効果的で有効射程の広い素敵な方法を考えだしてくれているに違いありません！ ドラえもんが無理なら、「夢をかなえて神さま」。

と、前ぶりがだいぶ長くなりましたが、聖書のお話に移りましょう。本日登場するソロモンは、サウル、ダビデに次ぐ、イスラエルの三代目の王様です。先代二人の王が王国樹立のためにがんばったこともあり、そのあとに続いたソロモンは、イスラエル史上稀に見る平和な時代を築いた王でした。ソロモンが王位にあったのは、紀元前 970 年から 931 年の約 40 年間で、即位直後に若干の流血があったことを除き、在位期間全体を通して他国との争いは少なく、国は政治・文化・経済的に大きな発展を遂げたのでした。今日の御言葉は、そんな偉大な王ソロモンが、父ダビデの跡を継いで王となった数年後の出来事を描きます。王としてはまだ経験が十分ではないソロモンに、神が夢の中で語りかける、という場面設定です。

「願い事があれば言いなさい。かなえてあげよう」(列王上 3:5)。「まるでほんとにドラえもん!」と思わせるような神の問いかけから始まる対話は、そのあとのソロモンの応答、そしてソロモンの応答に対する神の反応と約束、という流れで進んでいきます。ここで注目すべきは、ソロモンの応答部分です。神は自分の問いかけに対する、ソロモンの答えを「良し」とし、その答えを受けて、彼をイスラエルの歴史における他のどの王よりも、賢く知恵に満ち、正しい裁きを行う王、平和をもたらす王とするからです。6 節から 9 節に記されているソロモンの応答のエッセンスを引き出すと、二つに集約されます。一つは、ソロモンが、神を過去、現在、未来という歴史に働く方として認識し、自分と自分の父、そして自分が統治する国の人々をその神の歴史の中に位置づけたことです。過去を忘却し、現実から目を背け、未来を無視するのではなく、過去を踏まえ、現実を直視し、未来を描く。そして、もう一つは、ソロモンが神に求めたもの、「聞き分ける心」(列王上 3:9)です。「聞き分ける」は二つの単語からなります。「聞く」と「見分ける」。どちらもその行為が向けられる相手があります。その相手に向き直り、目を向け、耳を傾け、理解する。自分中心ではなく、相手に関心を払う。ソロモンが、自分の利益ではなく、共同体における人間関係を重視していたことがわかります。さらに、聞くことも、見分けることも、それ自体としては、力とは無関係であることも覚えておくべきでしょう。神は、ソロモンの応答を受けて、「あなたは・・・敵の命でもなく、聞き分ける分別を願った」(列王上 3:11)と述べていますが、これは、暴力によって国を統治するのではなく、非暴力を貫こうとするソロモンの意思を神が評価したことを示すものでしょう。

歴史に働く神の前に、自分たちをその神の歴史の中に位置づけたこと。そして、暴力ではなく、聴き、見分けるという非暴力の方法により、自己利益ではなく共同体の人間関係に関心を払ったこと。それが、ソロモンによってイスラエルに平和がもたらされた大きな要因でした。ただし、その平和は長続きしません。ソロモンが在位にあった間はよかったです。そのあとの世代から王国は分裂し、二つに別れた王国同士で、または他の国との間で争いが繰り返されたのです。幼いときから神に愛され(サムエル下 12:25)、最も賢く、公平で正しい裁きを行うことのでき

るソロモンでしたが、築かれた平和は万全ではありませんでした。ソロモンによる平和のほころびは、彼の在位中からすでに神によって指摘されていたことだったのです(列王上 11:11-13)。聖書は、平和が崩れていく理由を、「ソロモンが神の契約と掟を守らなかった」(列王上 11:11)ためとしています。ここで想定されているのは、ソロモンの配偶者となった女性たちが礼拝の対象としていた他国の神々を、ソロモンも拝むようになったこと、つまり異教の神々を礼拝したことです。宗教的、信仰的な観点からすればそうなのでしょうが、より実際的な理由は別のところにあったと考えられます。

ソロモン王時代には、比類ないほどの政治・文化・経済的繁栄がもたらされましたが、その背後には、格差が生じていたことが明らかにされています。一方で、直接生産や労働に従事しない貴族階級、知識人階級、および新しい商業活動で富を得た商人たちがいて、他方で、経済的／文化的豊かさを享受できず苦しい生活を強いられる人たちがいたのです(山折哲雄『聖書時代史 旧約編』95-96)。表面上の平和の背後で広がっていく格差。このアンバランスな状況に、ソロモンの限界が表されています。ソロモンは、ダビデの子として生まれましたが、ダビデはユダ民族出身であり、つまりはイスラエルの人間で、当然にソロモンもユダ民族のイスラエル人です。また、父ダビデ、その前のサウルとは異なり、ソロモンは生まれたときからすでに王家の人間でした。王を父にもつ男性の子ども、「王子」として幼少期を過ごし、成長してからは、ダビデのあとの王としての道をまっすぐに進んだのです。そんなソロモンが生きたのは、イスラエルの、王家あるいは上流階級に属する、男性たちに囲まれた、狭い世界、同質性が保たれた空間だったはずです。その世界、空間の中で、政治の最高権力者として歩んだソロモンは、おそらく、自分とは異なる背景に生きる人たちに寄り添うことができなかつたのでしょう。聖書には明記されていないので断定はできませんが、ソロモンが王宮の外で生きる人々のことを頭で考えるだけでなく、その人たちのそばに足を運び、生活の実情を知り、思いを聴き、心の声を汲み取り、理解することはなかつたのだと思われます。事実、ソロモンは、異なる背景をもつ人々、例えば、イスラエルの人々のうち、王族／貴族／商人以外の人たちを、神殿と王宮建設のための強制労働に駆り出し(列王上 5:27)、また外国の人々を奴隷として用いています(列王上 9:20-21)。

さらに、今日の聖書箇所直後の、自分とは真逆の境遇にある二人、聖書協会共同訳では「遊女」と訳されている女性と向き合った場面では、偏見とも思われるようなソロモンの姿勢が見え隠れしています(列王上 3:16-28)。ソロモンは裁きの場で、「剣」を持ち出し、女性たちが求めていたもの、ここでは子どもの命、を奪い取るように命じます。正しい裁きを引き出すための芝居であるとはいえ、「剣」という有形の力をもつ武器を持ち出し、それをちらつかせて子どもを殺すという命令を下すこと自体に暴力的な臭いが漂います。まして、王国の政治を司る最高権力

者であるソロモンによる命令です。どれほどの恐怖を女性たちに与えたことでしょう。たとえ身体的な傷が生じていないにせよ、精神的には相当のダメージを伴う「暴力」だったはず。「女性、しかも、遊女だから。」直前に否定したはずの暴力を二人の女性に向けることができたのは、そんな思いがあったから、と考えられなくもありません。「イスラエル人、王家、男性、エリート」。その枠を超えたところに、ソロモンの関心が向くことはありませんでした。自分とは異なる人の声を聴き、違いを理解することができなかつたのです。

21世紀の日本に住むわたしたちは、多様な背景をもつ人たちと共に生きています。民族や国籍の違い、それに伴う言葉や文化、習慣の違い。あるいは、性／セクシュアリティの違いなど、様々な違いがある中で、平和を求め、実現し、維持していくためには。冒頭でも見た通り、残念ながら、現状では日本に限らず、世界で、国粹主義的・自国第一主義的な考えが横行しています。狭い枠に閉じこもることで、自分たちにとっての平和を勝ち取り維持していこうという動き。日本における一連の戦争関連法の成立と、憲法改正へと向かう機運の高まりはこの動きの延長として考えられるでしょう。ただ、狭い枠での平和の実現には限界があることは、ソロモンの例によって示されていますし、また、第二次世界大戦下で、わたしたちの属する日本基督教団が軍国主義に走る国家政策に迎合していった結果を踏まえれば明らかです。

だから、枠を取り払う。異なる人たちを排除した上での平和ではなく、共に生きることによる平和を求めていく。そのために、互いの日常を、背景を、思いを、歴史を、違いを知る。そして、さらにそのために、お互いの過去を知り、現在に目を向け、未来を描いていく。聴き合い、分かり合っていく。もちろん、容易ではありません。表面上の「分かる」を超えて、真に相手のことを聴き、理解するというのは骨の折れることです。わたし自身、不得意で、そんな面倒なことをして余計な労力を使うのなら、最初から誰かと一緒にいることをしなければいいと思うことは多々あります。

だけど、難しいけれど、不可能ではありません。それを実現した人がいるからです。わたしたちにとってのロールモデル、主イエス。異国の人と出会い、語り合い、聴き合うことで、自分の持っていた偏見を捨てて関係性を築いていったイエス（マタイ 15:21-28, マルコ 7:24-30）。交わってはならないと言われていたサマリアの女性と神学論議を交わし、語り合ったイエス（ヨハネ 4章）。ファリサイ派、律法学者といった当時のエリートではなく、彼らに嫌われ、周縁に追いやられていた人、病を負った人、徴税人、などと共に歩んだイエス。そのイエスに倣う。神がソロモンに投げた問いかけは、今も響いています。イエスの声として、わたしたち一人一人に、届いています。

「願い事を言いなさい。かなえてあげよう。」